

■ 第12回『SCIXスポーツ・インテリジェンス講座』—スポーツの多様な見方、考え方—
～フットボールタウン神戸は、2019 ラグビーW杯から始まる

スポーツへの関心・熱気の高まりをどう市民生活に結びつけていくか～

第3回『ラグビーの持つ“多様性”“寛容”の精神を、

どう日本のスポーツ文化に融合させるか ～2019 ラグビーW杯からの取り組み』

講師：高崎利明氏（京都工学院高校 副校長 ラグビー部 GM）

岩淵健輔氏（男女7人制日本代表総監督 兼 男子セブンズ日本代表 HC）

司会進行：美齊津二郎氏（SCIX 理事）

日時：2018年9月8日（土）18:30～20:00

会場：神戸国際会館セミナーハウス



スポーツ界の知見豊かな方々を講師にお招きし、スポーツの在り方や人材育成のポイントを学ぶ『SCIXスポーツ・インテリジェンス講座』。今年度最後となる今回のテーマは、「ラグビーの持つ“多様性”“寛容”の精神を、どう日本のスポーツ文化に融合させるか ～2019 ラグビーW杯からの取り組み」。講師は、SCIX 開催の講座やセミナーでもお馴染みのお二人。ドラマ「スクール☆ウォーズ」のモデルにもなったこ

とでも有名な伏見工業高校改め、京都工学院高校副校長・ラグビー部 GM の高崎利明氏と、日本ラグビー協会男女7人制ラグビー総監督・男子セブンズ日本代表ヘッドコーチの岩淵健輔氏。

前回の『SCIXスポーツ・インテリジェンス講座』で講師を務めていただいた平尾剛氏の話にもあった通り、ラグビーという競技の特徴を伝える言葉に“多様性”があります。例えば試合では1チーム15人の選手がプレーをしますが、選手の体格・個性はさまざま。小柄な選手、大柄な選手、体重のある選手、足の速い選手といったように多岐にわたり、それぞれの適性に合った役割・ポジションが与えられます。また、日本代表の選出条件も「その国で3年以上居住し（2020年より5年に変更予定）、他国代表になったことのない選手」と至って“寛容”なスポーツです。そうした多様性・寛容の文化を、2019 ラグビーW杯日本開催を機に日本のスポーツ界にレガシーとして遺すべく、ユース世代、7人制日本代表の指導者お二人に語っていただきました。

会の冒頭、講師のお二人をお迎えするに先んじて、SCIX 理事・美齊津氏よりご挨拶と共に、この夏立て続けに起きた、西日本豪雨、台風21号、北海道地震といった天災に見舞われた方々へのお見舞いの言葉を述べました。80名にも及ぶ方々にご参加いただいた会当日は、受付にて



復興支援Tシャツも販売。サッカー元日本代表監督の岡田武史氏が代表を務める「FC今治/榊今治 夢スポーツ」が立ち上げた、西日本豪雨被災者を支援するための「『YOU ARE NOT ALONE』プロジェクト」により作成されたもので、SCIX 理事長である平尾誠二氏と生前親交が深かった岡田氏の活動を少しでもサポートできればと、SCIX でも販売を試みました。お買い上げくださった皆様には心より御礼申し上げます。

司会進行を務める美齊津氏の紹介により、いよいよ講師お二人が登場。大きな拍手と共に入場し、会がスタート。まずは、岩渕氏より、ジャカルタ・パレンバンで開催された第18回アジア競技大会の結果について総括。男子は決勝で香港に敗れ、銀メダルとなり、目標としていた金メダルにはあと一

歩及ばず。一方、女子は、なかなか勝てなかった中国に決勝で勝ち、アジア競技大会で初の金メダルを獲得するという結果に、岩渕氏も満足している様子。とはいえ、アジアの現状として、スリランカ、香港、韓国、中国といった国は非常に進んでおり、7人制をプロのような形で取り組んでいるため、ワールドカップ、オリンピックを通してアジアの地域内でも厳しい戦いが予想されると岩渕氏は懸念します。また、上位4チームと、それ以外の環境が揃わない国との差はかなり大きくなってきていると。その背景として、上位チームの各国のオリンピック協会が、アジア競技大会でのメダル獲得はもちろんのこと、オリンピック出場や、オリンピックでメダルを獲得するために、ボール競技に予算を割いて力を入れているということ。さらに、もう一つの理由として、アジアからの自動出場権が無い中で、いくら15人制ラグビーで頑張ってもワールドカップに出られる可能性が低い、それであれば、オリンピックに出られる可能性がある7人制に力を入れようというのが、アジアの現状なのだろうか。これは男女ともに、その傾向があるようで、15人制ではなく、7人制に力を入れている国が増えているようです。

このラグビー界の流れを受けて、日本でも、女子は数年前から整備をし、埼玉県熊谷を拠点に7人制のトレーニングを。男子も7人制だけを専門にする選手を集めてトレーニングをしていく予定とのこと。「今回のアジア競技大会に招集した選手たちも7人制専門でほぼプレーをしている選手たち。近年、競技として15人制と7人制でそれぞれの専門性が非常に強くなってきているので両方兼任は難しいのが実状。今現在も7人制に触れる機会はまだまだ少なく、これまでは15人制の貯金でやってきているのが現状なので、これをいかに脱却



できるか？と同時に、指導者育成も課題。来年に向け、フォーマットを変えて、7人制にもし
っかり力を注いでもらえる環境整備が急務」と岩淵氏。



続いて、菅平合宿を終えた高崎氏に、高校ラグビーの現状をうかがいました。「これまで7人制は、高校生年代でも15人制のついでのような感じで、大会の1週間くらい前にメンバーを決めてやるという形だったのが、今回のアシックスカップで初優勝した流通経済大学柏を観ると、ナショナルチームがやるような7人制に特化した練習をかなりやり込んで大会に望んでいる印象を持ったので、これは(流通経済大学柏が)勝つなど。これまでは個々の能力の高い東福岡などが勝つ傾向が高かったが、これからは7人制に特化して練習をやり込んできたチームが勝つだろうなど。今後は7人制と15人制は分かれていくのかなと。それに伴って当然指導者もそれを理解して指導していかないと難しい時期に入った」と、高校生年代でも代表同様、7人制と15人制の専門性、差別化の傾向が顕著であることがわかり、

二極化は必至という現実がうかがえました。

さらに、近年の高校ラグビーの傾向として、エディー・ジャパン以降、フィジカル、フィットネスが重要視されていること。さらに、代表でされているような裏へのパスや、片手パスなどをする選手も増えていると高崎氏は言います。その理由として「我々の頃と比べると映像でトップレベルのプレーを観る機会が圧倒的に多く、真似したい！やりたい！という気持ちがスキルアップに繋がっているような気がする」と分析。高校生年代のフィジカル、フィットネス、スキルの向上は頼もしい限りで、年末年始の花園が楽しみなのはもちろんのこと、ラグビー界の未来を期待させるコメントだったのではないのでしょうか。

ここで、続いてのテーマに移る前に、「15人制ラグビー日本代表資格」がプロジェクターに映し出され、美齊津氏より説明がありました（以下、テキストのみ記載）。

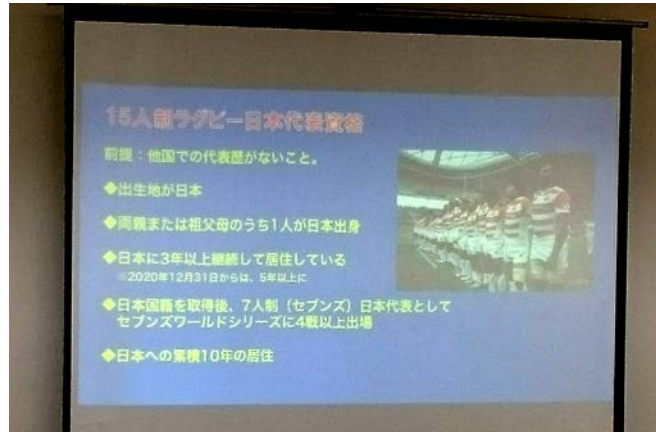
（前提：他国での代表歴がないこと）

- ・ 出生地が日本
- ・ 両親または祖父母のうち一人が日本出身
- ・ 日本に3年以上継続して居住している（2020年12月31日からは5年以上に）
- ・ 日本国籍取得後、7人制日本代表としてセブンズワールドシリーズに4戦以上出場
- ・ 日本への累積10年の居住

（一部現在検討中）

上記条件が満たせる選手、満たない選手で先述のビッグゲームへの出場可否の明暗が分かれるものの、サッカーなどの他競技と比べると“寛容”と言えるラグビー。国籍にこだわらない“多様性”がノーサイドの精神にも繋がっているとと言えるでしょう。

例えばということで、高崎氏が、高校日本代表メンバーとして指導したことのある松島幸太郎選手（15人制日本代表・サントリー）の名前を挙げ、「彼は、知らない人が見れば外国人かもしれないが、れっきとした日本人で、今や日本代表に不可欠な選手」と評しました。松島選手は、南アフリカの「シャークス（のアカデミー）」に所属していた選手ですが、当時、「2015W杯には誰が必要か？」と考えた時に「松島は外せない！」ということで、エディー・ジョーンズ氏を連れて、戻ってきてくれるよう頼みに行ったのが岩淵氏だったことが、この場で発覚。思いがけない裏話を聞くことができました。



「ラグビー人気・競技人口拡大」というテーマに移り、2019W杯日本大会～2020東京五輪とビッグイベントが続く中で、「代表チームとしてはグラウンドの上でいいパフォーマンスを見せて、いい結果を残すということ。ただ、2016リオオリンピックで4位だったにもかかわらず、空港には誰も居ない（苦笑）」という現実を見ると、2019W杯で色々と前向きなことも起こるだろうと思うとはいえ、この二年で何らかのことができないとその先に繋がっていかないと実感している」と岩淵氏は、この二年のビッグチャンスの重みを切実に語ります。

一方「日本のスポーツ文化は独特なところがある」と高崎氏。日本のスポーツ文化は野球中心。メディアが作り上げていったドラマがあり、その流れに「スクール☆ウォーズ」というドラマがフィットしたと。「スクール☆ウォーズ」の、ある意味当事者としては、誇らしくあると同時に複雑な心境と高崎氏は言います。「学校見学に来た人には『バイク走ってない。ガラス割れてない』と言われてきた（苦笑）」。とはいえ、それと同時にラグビー人口が激増したのも事実。2015W杯で南アに勝利し、歴史的金星をあげ、一時的ブームで競技人口が増えたとはいえ、「スクール☆ウォーズ」に及ぶ効果はなかったという現実。ラグビーというスポーツの特性や、良いところを、指導者が伝えきれていないのではないかと、高崎氏は問いかけます。「今は勝つことが大事で、いい選手を呼んできて優勝するという時代になっているが、選手の育成をしてく上で、指導者の育成をしていかないと次に繋がっていかないと提言。

さらに、話題は「受け継いでいきたいラグビー文化、ラグビー精神」に及びます。日本代表に関わり始めた2012年当時は、日本代表としての文化や哲学がなかったと当時を振り返る岩淵

氏。2020 東京五輪ではメダル獲得を目標とし、それに向けて取り組んでいる男女セブンズ。しかしながら、むしろ、メダル獲得ということ以上に、今後に受け継がれていく文化や哲学が必要だと、男女それぞれ、セブンズの7にちなんで、コネクト、リスペクト、コミットメント、チャレンジ…といった具合に、7つのキーワードを挙げて理念を掲げるようにしたのだとか。また、女子の場合、高校生年代で突然日本代表に選出された選手も多く、今現在も平均年齢20歳前後と若手が中心ということで、日本代表としての誇りと言ってもピンと来ていないところがあったそう。「それが最近ようやく、ナショナルチームとして戦うことの意味がわかってきたかなと感じている。そういう点においても、女子の指導者育成は急務」と課題を挙げます。



これまでの岩淵氏の話を受けて高崎氏が、若き日の岩淵氏の印象を語り、会場から笑いを誘う場面もありました。「それにしても、私がユースの監督をしていた当時、（岩淵氏は）軽いプレーをするタイプだったので、まさか今のように協会の仕事をするような人間になるとは思っていなかった(笑)」。

会場に笑いが漏れる中、「受け継いでいきたいラグビー文化、ラグビー精神」に話は戻り、こう続けます。「いいものを受け継ぎ、新しいものを作り出す。私は教育の一環でラグビーをしている。そこは恩師でもある山口先生から、私自身が受け継いでいるところ。その上でラグビー文化を広げていきたい。今や、スポーツ界が体罰問題などで揺れている。昔はどの競技もそういった指導スタイルがまかり通っていたことは事実。それであっても、ラグビーという競技は、試合中に監督はベンチに入れないというルールがあり、他競技にはない“自由”な面がある。これはラグビーという競技の大きな特徴。スポーツ界にはびこる昔ながらの、指導者によるトップダウン体制を変えていく上で、ラグビーはその牽引者になっていければ」と。

さらに、「共産国に勝つには？」との美齊津氏からの問いかけに、「セカンドキャリアの充実」と広い視野での分析を見せる講師お二人の答えに、会場の参加者が頷く姿も見られました。「オリンピックに出られる選手はひと握り。仮に、アカデミーに選ばれてもオリンピックに出られるのはひと握り」という岩淵氏のコメントに、高崎氏も同調し、「メダルを獲得すれば一生生活が保障される共産圏に対し、日本の場合、現状として、プロ化をしてもセカンドキャリアが社会に適用していない。その改善なくして共産国には勝てない」と強調。さらに、それを踏まえて、「中学生を勧誘する＝その子の一生を背負うくらいの覚悟を持って考えている」と熱い想いを口にしました。その想いを形にすべく、現在の小・中学生を対象とした「伏見クラ

ブ」に加えて、将来的にはシニア対象のクラブも創設する構想があると今後の展望も披露。生涯雇用をしてくれる企業スポンサーをつけ、企業人として働きながらラグビーを楽しみ、小・中学生たちの指導にもあたるといふ仕組みづくりを考えているのだそう。公立高校が学校の部活とは別にクラブチームを抱えているということ自体、あまり例を見ない前衛的な試みと言えますが、そのクラブチームを、セカンドキャリアを見据えた仕組みづくりに発展させようというチャレンジに、ラグビーファンはもちろん、スポーツ関係者は期待を寄せることでしょう。

日本では企業スポーツとして発展してきたラグビー。「いい側面もありましたが、今後はより地域と密接に結びついていくことがスポーツ発展に繋がる。そのためにもグラウンドやクラブハウスなどの環境整備が課題」と岩淵氏。2019 ラグビーW杯、2020 東京五輪に向けての課題、そして、さらにその先をも見据えた課題はまだまだあるものの、一つ一つ課題を改善、解決できるよう、それぞれの立場で地道にできることをし続けること。ラグビー界、ひいてはスポーツ界を牽引する講師お二人の意志と覚悟を見せていただいたように思います。

今回で今年度の『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』は最後になりますが、今後もラグビー発展、スポーツ文化発展のお役に立てるような企画を開催していく所存であります。今年度もたくさんの方にご参加いただき、ありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



(レポート 中野里美)

スポーツ振興くじ助成事業

